

登別市・白石市姉妹都市提携30周年

姉妹都市

白石市の紹介



白石市の中心部にあるまちのシンボル白石城



白石城をモデルに建てられた登別市郷土資料館

登別市と宮城県白石市は、昭和58年10月26日に姉妹都市の盟約調印を行い、本年は提携30年という節目の年を迎えます。30周年を記念して、8月25日(日)に記念式典などを開催し、11月には市民の皆さんから参加者を募集して、白石市を訪問する記念ツアーを行います。

今号では、白石市と登別市のゆかりや白石市の姿を紹介します。

〔白石市の歴史〕

白石市は、蔵王連峰と阿武隈山脈に囲まれた城下町です。その歴史は古く、白石城の名が歴史上に現れるのは、戦国時代です。

伊達政宗随一の名参謀、片倉小十郎景綱が政宗からこの地を拝領したのは1602(慶長7)年。約一万五千石の城主となった小十郎景綱は、城の改築と城下の規模拡充に励み、現在の白石市の基礎を築きました。

以後片倉家は、明治維新までの約260年間、十一代にわたって



この地を治め、最終的に石高一万八千石になりました。

明治維新を迎えるころには武士の生活は厳しくなり、白石領も例外ではなく、非番には畑仕事をするなどして生活を支えていました。

このような情勢の中、戊辰戦争に敗北した片倉家は、混乱と危機におちいりました。

そこで第十一代城主である片倉小十郎邦憲は、家臣の経済的破たんを救い、武家の面目を保ちながら家中の建て直しを図るため、祖先の霊を祭る常英山(山寺)に家臣を集め、北海道への移住を決めました。

〔現在の白石市〕

○白石市の位置

白石市は、仙台市から南へ約50キロ、宮城県の南部、福島県

白石市のマスコットキャラクター

ポチ武者いじゅーろー



いじゅーろー



この県境に位置する、人口約3万7千人、面積286・47平方キロメートルの城下町です。

昭和29年4月に白石町と周辺6村が合併して白石市となりました。

市内の交通網は、隣町へ続く道路が、市の中心部から放射状に広がっています。

白石市が、宮城県と福島県の両県庁所在地の間にあることから、東北新幹線の白石蔵王駅、東北自動車道の白石インターチェンジが設けられ、首都圏に直結しています。

また、仙台空港へ車で45分と、交通の要所です。

白石市のシンボル

白石城

白石城は、白石市の中心部にある益岡公園に位置し、中世期末期は、地元の土豪白石氏の居城でした。

1602（慶長7）年以降は仙台城の支城として伊達家の重臣片倉氏が代々居城し、1615（元和元）年の一国一城令後も例外的に『城』としての存続が認められました。

白石城は、明治維新時の奥羽越列藩同盟の公議府が置かれた

場所であり、歴史が転換する時に、重要な役割を果たしてきました。

明治2年には白石藩知事となつた南部家（岩手県盛岡市）が城主となり、その後按察府という明治政府の広域行政府が置かれました。

白石城は後に、大蔵省へ管轄が移り、明治7年に民間に払い下げされました。

以後随時解体され、茶室、古井戸、大手門礎石、石垣の一部を残すのみとなりました。

白石城の復元は、白石市民の長年の夢であり、市民から寄付が寄せられるなど復元の運動が起り、平成5年には石垣、平成7年に三階櫓（天守閣）と大手門を復元しました。

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震では、白石市の震度は6弱を記録し、白石城は三階櫓や大手門のしっくいなどが落ちるなどの大きな被害を受けました。

しかし、平成24年3月、国の補正予算で財政措置を受けられたことから、震災復旧工事が行われ、現在は以前の美しい姿を取り戻しています。

なお、登別市郷土資料館は、

白石城をモデルとして昭和56年に建てられました。

「深谷や温泉のある豊かな自然」

○小原温泉

白石川上流のいで湯、緑豊かな深谷に面した風光明媚な湯の里です。800年の歴史があり、眼病に効く温泉といわれ親しまれています。

○碧玉溪

国道113号を小原方面（西方）に向かい、白石川上流に出ると碧玉溪が姿を現します。明治の文豪・徳富蘇峰がこの地を訪れた際に、水と緑と岩が奏でる溪谷美に感動し、命名したといわれています。

夏は深い緑色を宿した玉のよ



小原温泉

うな美しさ、秋は鮮やかな紅葉など、一年を通じてその景色を楽しませてくれます。

○鎌先温泉

南蔵王不忘山の頂からくだつた谷あいに湧く、静かな温泉郷です。鎌先温泉の名称は、600年以上も前に、里人が鎌の先で見つけた温泉ということに由来しています。

神経痛や手術後の保養に効果があるといわれ、奥羽の薬湯として親しまれています。



碧玉溪



鎌先温泉

「温麺（うーめん）は親孝行の味」

白石つーめんは、胃にやさしい思いやりが込められています。胃病を患つた父のために、息子が旅の僧から油を使わない麺の製法を学び、苦心して小麦粉と塩水だけの麺を完成。消化が良く、滋養にも富んでいたことから、父親は快方に向かいました。息子の心の温かさを取って『温麺』と呼ぶようになりました。その後、片倉家の奨励、保護政策により、その製法が広まりました。きれいな水と乾いた清澄な空気が製麺に適していたことから、名産として定着しました。



以来、400年あまりの伝統を大地に、味、品質を磨きあげ、ゆでやすく、食べやすくと定評が

あります。

また、工夫次第でいろいろな料理メニューが広がるのも魅力です。



「平安期の女流文学者も愛用した白石和紙」

平安時代から、みちのく紙は『ぶくよかに、きよへ、うるわじ』と評判でした。

この伝統を受け継ぐこと、伊達藩主は紙すきを奨励。特に白石・刈田地方は、原料（コウソ）と水質に恵まれ、良質の紙を産出しました。

この伝統の技術は、絶えることなく受け継がれており、さまざまな工夫をしています。

丈夫でぶくよかな白石和紙は、

版木にのせて模様を打ちだしたり、柿じぶやくるみなどの天然染料で染色し、札入れや名刺入れ、ハンドバックなどに加工されています。

また、奈良・東大寺二月堂の『お水取り』で、修行僧が着る紙衣にも使われています。

「白石市の伝統『弥治郎こけし』」

弥治郎は、不忘の山すその谷あいに抱かれた小さな木地師の集落です。

弥治郎で生まれるこけしは素朴で、しみじみとしたかわいらしさがにじみ出ています。



弥治郎こけしの特徴は、ヘルメットのように彩られたろくろ模

様の大きな頭と、ろくろ模様が多用された胴体にあります。

はじめは子ども向けの玩具として作られていましたが、現在は観賞用として収集され、年齢を問わず多くの方の目を楽しませていきます。

「登別市と白石市のきずなをらなる発展へ」

登別市と白石市は、昭和58年10月26日姉妹都市の盟約調印を行いました。

両市のゆかりは、明治2年、太政官から幌別郡を拝領された旧仙台藩白石城主片倉家一門が、開拓の礎を入れ、登別市の礎を築いたことに始まります。この歴史的なゆかりに基づき、両市が友好と理解を深めお互いに発展することを祈念して姉妹都市を提携し、本年は30年という節目を迎えることができました。

昭和60年10月15日に、登別・白石姉妹都市交流推進協議会を設立し、以来、少年のスポーツ交流やふるさと豆記者訪問、こけしの絵付け教室、市民団体の交流や物産展の開催など、相互に活発な交流が行われてきました。

平成23年4月29日には、白石

市の姉妹都市である神奈川県海老名市と登別市、白石市の3市が、これまで以上に経済や市民の交流を深め、共に家族や姉妹、兄弟、友達のような関係を築き上げることを宣言した『トライアングル交流宣言』に調印しました。

また、平成15年に行われた姉妹都市提携20周年記念事業には、白石市との歴史的なゆかりがある札幌市白石区より、白石区長をはじめ、白石区ふるさと会の皆様にも出席していただき、その後も継続した交流が行われています。

8月25日に開催する姉妹都市提携30周年記念事業には、白石市をはじめ、海老名市、札幌市白石区の皆さんが参加される予定であり、白石市を中心とした交流の輪が大きな広がりを見せています。

問い合わせ
総務グループ
☎(85) 1130
FAX(85) 1108
Eメール: somu@city.noboribetsu.lg.jp